

1 外貨建て保険を 取り巻く環境

1998年12月に日本で初めて外貨建て保険が発売された。それ以来、外貨建て保険は商品数、保険種類ともに増え続けているが、背景には国内景気の低迷による記録的な低金利や、新外為法の施行などが挙げられる。また、円による資産だけを保有することに不安を感じる顧客が多くいることも忘れてはならない。顧客自ら資産のリスク分散を図る意識が高まる中、販売現場に携わる者として、外貨建て保険をとりまく状況をここで確認しておこう。

CFP®◎柳澤美由紀

やなぎさわ・みゆき◎

ファイナンシャル・プランナー（CFP® 認定者）。独立系FP会社を経て、2000年に独立。執筆、セミナー講師、有料相談などを手掛けている。著書は「保険料あなたはたくさん払すぎ」（あさ出版）、「人生で『必ずかかるお金』に困らない本」（大和出版 共著）など多数。

外貨建て保険の登場

「外貨建て保険」とは、外貨で保険料を払い込み、外貨で保険金や年金、解約返戻金が支払われる生命保険・個人年金保険のことである。

為替リスクはあるが、基本的には定額の生命保険や個人年金保険と同じ仕組みといえるだろう。2005年5月現在では、終身保険、養老保険、個人年金保険の3種類が発売されている。

これまで多くの商品で対象とする通貨は米国ドルが中心であったが、最近ではユーロや豪ドル建ての保険も登場している。

新外為法を背景にニーズ拡大

外貨建て保険が開発された背景には、大きく分けて3つのポイントがある。

第一のポイントは、1998年4月に施行された新外為法の影響だ。

新外為法とは、いわゆる為銀主義^{*1}を廃止して、内外資本取引をほぼ完全に自由化した「外国為替及び外国貿易法」の大改正のこと。

この改正により、外貨で資産を保有しようという顧客ニーズが高まることを見込んで開発されたのが、外貨建て保険である。保険会社側からみても、手数料などの資金面や事務面での負担軽減効果が得られるため、商品化に踏み切ったのではないだろうか。

円と外貨の金利差が拍車をかける

第二のポイントは、これまでにない日本の市場金利の低迷を受けて、米国など諸外国との金利差が拡大したことが挙げられる。

日本で初めて登場した外貨建て個人年金保険は1998年12月、ジー・イー・エジソン生命（現・AIGエジソン生命）の『えんどル君』（米国ドル建）だ。

この商品の発売翌月（1999年1月4日）の10年国債利回りを比較したところ、日本は1.985%であったのに対し、米国は4.66%と、2.675%もの利回りの差が見られた。現在でもこの格差は埋まっておらず、むしろ若干ではあるが広がっている。

外貨建て保険の保険料は、その通貨を発行する国の公社債を中心に運用される。投資対象である外国債の利回りをもとに予定利率・積立利率が決まるため、円建ての保険に比べて利率は高くなる傾向にある。

*1 すべての為替取引が大蔵大臣が認可した外国為替公認銀行（為銀）に限定されていたことをいう。

例えば、プルデンシャル生命『米国ドル建終身保険（無配当）』の予定利率は4.5%（2005年6月1日現在）。一般的な円建ての無配当終身保険の標準予定利率は1.75%であるから、その差は歴然といえる。

ペイオフ対策+資産分散対策

第三のポイントは、ペイオフ対策用の保険として銀行などの金融機関から外貨建て個人年金保険の開発ニーズが高まったことが挙げられる。

これまでも銀行窓販用の個人年金保険には変額年金、円建ての定額年金があったが、ここに外貨建て年金を加えることで、預金者に対して資産分散の提案がよりしやすくなるという。

実際に人気は上々で、アリコジャパンの2003年度における外貨建て個人年金保険の新規契約件数・契約高はとも

に対前年比10倍超。同社の個人年金保険（新規契約）の9割は外貨建ての商品というから驚きだ。

変額年金から外貨建て年金へ

一方、これまで不明確であった変額年金の責任準備金の積立方法に一定のルールを設けるために金融庁が導入した「変額年金保険等に係る責任準備金積立ルール等改正」も少なからず影響を与えているようだ。

保険会社は、変額年金の次を担う銀行窓販用の個人年金保険の柱として、外貨建ての定額個人年金保険に注目している。昨秋（2004年9月）から今年にかけて、ハートフォード生命、三井住友海上シティ生命、アクサ生命、AIGスター生命から銀行窓販専用の外貨建て個人年金保険の新商品が発売されており、さらに今後も増加傾向にあるといえる。

商品の独自性で顧客ニーズを掘り起こす

終身保険の利率は固定か変動か

外貨建て終身保険を取り扱っているのは、アリコジャパン（『ドル建積立利率変動型終身保険』）とプルデンシャル生命（『米国ドル建終身保険』）で、いずれも米国ドル建ての商品だ（2005年5月9日現在）。

これらの商品は、「老後は海外で暮らしたい」など米国ドルにニーズを感じている層や、日本に対する信用力の低下などで資産の通貨分散の必要性を感じている層に人気がある。また、円建て保険に比べて高い予定利率と為替差益を狙ったキャッシュバリュー（解約返戻金）目的で加入する人も多いようだ。

2社の商品の違いは、プルデンシャル生命が保険期間中固定した予定利率4.5%（2005年6月1日現在）を採用しているのに対して、アリコジャパンは3%の最低保証はあ

るものの積立利率が毎月見直される点だ。将来、米国市場金利が高騰することを期待するのか、それとも加入時点で死亡保険金や解約返戻金の米国ドルベースでの金額を把握しておきたいのかによって、選択する商品が分かるところである。

年金受け取り可能な外貨建て養老保険も

外貨建て養老保険は、AIGスター生命『米国ドル建養老保険』『満期でドル』、アリコジャパン『ドル建積立利率変動型養老保険』、プルデンシャル生命『米国ドル建リタイアメント・インカム』が発売されており、いずれの商品も米国ドル建てになっている（2005年5月9日現在）。

AIGスター生命とアリコジャパンの商品に関しては、保険料の払込方法（AIGスター生命は一時払い・月払い・半